

俳句通信

特別作品20句 鈴木しげを「魚は氷に」

特集〈同人誌の現在——同人競詠10句〉

青林檎
アジール
梓
豈
家
韻小坪健水「日脚伸ぶ」
青山酔鳴「海市」
上野一孝「椿生く」
筑紫磐井「あの評論家」
竹内秀治「一番分」
永井江美子「暦日抄」絵空 中田尚子「号外」
円錐 和久井幹雄「ボスティング」
OPUS 坂本 登「虎杖の新芽」
オルガン 鶴田智哉「覚え」
トイ 干場達也「音楽堂」
なんちや 鈴木不意「春眠」
ににん 末永朱風「ふえてゆく光」
猫街 赤石 忍「チューリップ井」
ベガサス 羽村美和子「春の雷」
棒 青山 丈「吟行の椿」
や 中村十朗「風は木に」
鯛 野口明子「春雲」

●作品●池田尚文・はりまだいすけ・山崎 聰・
飯野幸雄・関 成美・柴田鏡子・古田紀一・
仲村青彦・橋本菜治・清水 伶・
野ざらし延男・川崎雅子・中村正幸・
加藤峰子・柴田佐知子・吉田千嘉子・
檜山哲彦・稲田睦子・加藤哲也・
辻村麻乃・根橋宏次・有住洋子・
萩野明子 ほか

甲州の4月





山
つ
つ
じ
照
る
只^{ただ}
中^{なか}
に
田^{ひら}
を
壟^り
く
飯
田
龍
太

山ツツジ

五月連休にいつものようにヘラブナ釣りがあまり上手でない四人で岡山県と広島県のダム湖に出かけた。

初日、新見市の河本ダムは釣れなかった。その夜は新見駅前のホテルに泊まり、四人では大き過ぎる風呂に入った。「藤田さんお腹がずいぶん出てきましたね」と言うと、お腹を軽く摩って寂しげに笑い、夕食もあまり食欲がないと言った。

二日目は広島県の備後三河にある神農湖へ向かった。県境を越え、薄暗いヘアピンカープの急坂が終わると緩やかなカーブになった。赤松の中にブナなどの広葉樹の若葉が輝き、ヤマブキや山ツツジの花が眩しい。開けた窓から入る風が実に気持ちが良い。

「杉原さんは運転が好きですねえ」と藤田さんが明るい声で言った。そうかも知れないと思った。しかし神農湖でも釣れなかった。

三日日は福山市の芦田川に行き、ここでみんな三日分のヘラブナを釣り、ほっとして帰路に着いた。

翌日、藤田さんから明るい声で楽しい釣りでした、と電話があった。二ヶ月後、藤田さんは亡くなった。

絵・文 杉原武弘

特別作品

20句

魚は氷に

鈴木しげを

志功の書「風鶴」寒も明くるべし

春がきてブルーインクのややに鬱

梅白し一齡加ふばかりにて

友二忌や今の渋谷は余所の街

中継はハチ公前や雪二月

同人誌の現在

同人競詠10句

結社誌にはそれぞれの理念があり、

同人誌にはそれぞれの方向性があるようです。

そして、近ごろ同人誌の動きが活発な感じがします。

そこで、各同人誌からおひとりずつ登場していただきました。

同人誌の現在の風景が見られるはずです。

青林檎
アジール
梓
豈家韻
絵空
円錐
OPUS
オルガン
トイ
なんぢや
ににん
猫街
ペガサス
棒
や
麟

日脚伸ぶ

小坏健水

〔青林檎〕

忠敬の一步に日脚伸びにけり

寒晴や右も左も太平洋

上り下りどの径ゆくも野水仙

隧道を抜けしこちら風花す

こあくつ・けんすい

昭和14年（1939）11月6日・茨城県生まれ

深見けん二・斎藤夏風に師事

平成20年「青林檎」代表

29年「秀」入会 染谷秀雄に師事

令和4年「初桜」入会 山田閨子に師事

句集に『滝野川』『六丁目』

自註句集『小坏健水集』



待ち合わせ

小川美知子

雛

雛壇といふ歳月を灯せり

松岡隆子

昔、上の娘が生まれてしばらくして、実家の母がお雛様を買うために上京してきた。赤ん坊を夫に頼んだのかどうか忘れたが、母と2人で雛を買いに行った。小さな雛飾りでいいと言うのに、大概なことは好きにさせてくれる母が、これだけは譲らなかった。(その後七五三の時は母が私の娘に高価な着物を買おうとして私が阻止した。いま思えば母の思いどおりにさせてあげれば良かった。) 私たち夫婦は当時お金がなかったし、部屋も間借りをしていた。

母が買ってくれた七段飾りの雛人形は、6畳間と台所だけで風呂も無い暮らしにはあまりに不似合いだったが、幸い家主のおばさんが雛を飾るための場所を提供してくれて初節句は華やかに祝うことが出来た。

その後、普通のアパート(風呂付き1DK)に移ると飾る場所がなく、数年間は内裏雛だけを飾った。ようやく七段飾りをちゃんと飾れるような集合住宅に移り、そ

の時代は小学生の娘達のために頑張ってひな祭りをやった。3月3日はその頃勤め先の学校の学年末テストの時期だったが、この日はやはり、早めに帰宅してご馳走を作った。当時勤めていた学校の先輩の先生がスポンジケーキの焼き方を教えてくれたので、しばらくは、ひな祭りの定番が散らし鮎と苺を載せたデコレーションケーキだった。3月の最初ころの寒い日に泡立て器をカシヤカシヤ回して卵を泡立てたのを覚えている。

子供が大学生や高校生になり、私の仕事も忙しくなった頃は雛祭なんて忘れていた。

最後の引っ越しでいまの家に移ると、間もなく娘達は出てゆき、それからまた何年も経って、この頃お雛様を飾るようになった。

俳句をやっていたいなかったら、自分以外誰も見ない(夫はちらっと見る)七段飾りを飾ったりしないだろう。今年はやめようかなと思っていると、或る朝やにわに、飾らねばという気持ちになる。今朝もそうだった。

先ず和室の炬燵を片づけないと場所がない。片づけて掃除して、1階の寝室に置いてある大きなダンボール箱2つ、中くらいが1つ、小さいのが1つ、計4つを運び



前列右から中戸川氏、波戸岡氏、山田氏
後列右から星野氏、藤本氏、佐藤氏

ゲスト 佐藤明彦・中戸川由実

波戸岡旭・山田潤子

ホスト 星野高士・藤本美和子

編集部 本日の参加者は「童子」同人の佐藤明彦さん、「残

心」代表の中戸川由実さん、「天頂」主宰の波戸岡旭さん、「初桜」主宰の山田潤子さん。5句投句、7句選です。忌憚のない意見交換をお願いいたします。

高士 今日は点がけっこうバラケましたね。点が入っていない句が少なくてですね。4点句があります。

チェリストの深きプレスや春の宵

（明彦 高士）

明彦 「プレス」は。息継ぎ。ということなんですが、フルートとかトランペットとかの「プレス」ならよく分かりますけど、これはチェリスト。全く「プレス」とは関係ないんだけど、この「プレス」は演奏中に感情が高まったときに「プレス」をしたんだろうと。チェロという楽器がよく効いているような気がします。

美和子 音楽のことに詳しいわけではないんですが、明彦さんが仰ったように、息づかいと関係がない「チェリスト」だから、「プレス」が面白かったんだと思いました。「春の